

ソルフェジオ周波数の真実

ソルフェジオ周波数は古代の音階ではない！だれかによって最近考えられたもの！

528Hz と 396Hz は 440Hz から作られている！

ソルフェジオ周波数はカバラ数秘術で作られている！

＜ソルフェジオ周波数とは＞

ソルフェジオ周波数は近年癒しの世界で大きく取り上げられています。それはグレゴリオ聖歌に使われた失われた古代の音階だと言われています。ソルフェジオ周波数のそれぞれの音には次のような効果があるとされます。

- ・ 174Hz 意識の拡大と進化の基礎
- ・ 285Hz 多次元領域からの意識の拡大と促進
- ・ 396Hz 罪の意識や恐怖の解放
- ・ 417Hz 変化に挑戦する心、知性
- ・ 528Hz 無限の可能性、DNAの修復、奇跡
- ・ 639Hz 人間関係の向上
- ・ 741Hz 問題を解決する力、表現力
- ・ 852Hz 直感力の覚醒
- ・ 936Hz 高次元、宇宙意識とつながる

ソルフェジオ周波数については、レオナルド・G・ホロウィッツ著「ジョン・レノンを殺した凶気の調律A=440Hz」（徳間書店）で詳しく論考されていますが、断定的な結論部分も多く納得できない人も多いと思います。それについて小論では批判的に補足を加えました。

＜528Hz と 396Hz は 440Hz から作られている＞

ソルフェジオ周波数では 528Hz と 396 Hz がとくに重要視されているようです。そこで 528Hz と 396 Hz を分析してみました。そうすると 528Hz と 396 Hz は 440Hz と純正音程関係にあることが分かりました。純正音程とは音と音との関係が単純な整数の比となる音程のことで、それを使った音律を純正律といいます。純正律による音階では主要和音が完全に協和します。

- ・ 528Hz (C/ド) と 396 Hz (G/ソ) は、440Hz (A/ラ) から純正律で得られます。
- ・ 440Hz をラとして純正律でチューニングすると、ドは 528Hz、ソは 396Hz となります。

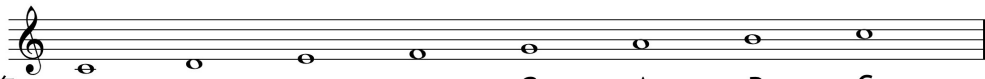
$440 \times 6/5 = 528$ （純正律での短3度〈この場合はラード〉の比は $6/5$ ）

$264 \times 3/2 = 396$ あるいは $220 \times 9/5 = 396$ 〈264 Hz は 528Hz の 1 オクターブ下、220 Hz

は 440Hz の 1 オクターブ下) (純正律での完全 5 度(この場合はド-ソ)の比は $3/2$ 、短 7 度(この場合はラ-ソ)の比は $9/5$)

A=440Hz を基準にして、純正律で C Major (ハ長調) を調律 (チューニング) すると、次のようになります。

A=440Hzの純正律チューニング

								
音名	C	D	E	F	G	A	B	C
階名	ド	レ	ミ	ファ	ソ	ラ	シ	ド
音高の比	1	$9/8$	$5/4$	$4/3$	$3/2$	$5/3$	$15/8$	2
振動数(Hz)	264	297	330	352	396	440	495	528
(平均律(Hz))	261.6	293.7	330.6	349.2	392.0	440	493.9	523.3

ホロウィッツ氏は C (ド) を 528Hz にするためには、A=444Hz でチューニングするように薦めています、たしかに平均律で A=444Hz とすれば C=約 528Hz となります。厳密には、 $444 \times (2 \text{ の } 3/12 \text{ 乗}) = 528.007959\dots$ と割り切れない無理数なのです (完全には協和しない)。

国際標準ピッチ A=440Hz は、1939 年ロンドンでの国際度量衡会議で決められた歴史的に新しい標準ピッチです。それ以前は地域や時代で様々な異なったチューニングが行われていました。ヨーロッパでは 17 世紀から 19 世紀にかけて、基準ピッチの A 音は A =380Hz から A=500Hz ぐらいまでのばらつきがありました。モーツァルトの持っていた音叉は A=421.6Hz だったと言われています。

ソルフェジオ周波数は明らかに 440Hz を基準に作られています。つまりそれは 20 世紀以降に考えられた (おそらくここ 10 年以内) ということを意味します。

<528Hz と 396Hz は何故気持ちが良いか>

ソルフェジオ周波数で 528Hz は奇跡の周波数といわれる中心の波動とされています。それに次ぐのが 396Hz で、音階名の ut (今日のドに相当) が当てられるベーシックな周波数とされます。528Hz には mi の音階名が与えられています。この二つの音、たしかに聴いていると気持ち良い気がします。何故でしょうか？

1939 年以降世界では A=440Hz が標準として使われるようになりました。現代では様々な基準音や信号音に 440Hz が使われており、現代人は 440Hz に洗脳されているといっても良いでしょう。この辺のところは、ホロウィッツ著「ジョン・レノンを殺した凶気の調律 A=440Hz」に書かれていることとも一致します。ただし 440Hz 陰謀説には賛同しません。

また日常にあふれる CM 音楽やジングル、音楽を使った合図や警告などで使われる曲のキー（調）は、圧倒的に C Major（ハ長調）と G Major（ト長調）が多いのです。現代社会は A と C と G の音に満ち溢れていると言って良いでしょう。ところが現在使われている平均律という調律法では、音と音を響かせたとき本当にきれいに調和しません。完全に調和して共振させるためには純正律という調律法を使わなくてはなりません。純正律は各音階音を出来るだけ単純な比（分数）で作ります。このため響きが完全に共鳴するのです。ところが平均律では各音階音を完全な平均値（等比数列における平均値—2 の $n/12$ 乗）で作るので、各音は割り切れない無理数となってしまいます。このためメロディー的なバランスは良いのですが、本当に純正な協和音は作ることができません（うねりが出てしまう）。440Hz に洗脳された耳にとって平均律の C（523Hz）と G（392Hz）は、普段は気がついていないのですが、感覚の奥の無意識領域でどこか気持ち悪さを感じているのでしょうか。その耳に C（528Hz）と G（396Hz）を聴かせると、なんとなく清かな響きを感じるということはごく自然な反応ではないでしょうか。つまり、528Hz と 396Hz は 440Hz と相反する振動数ではなく、純正に調和しあう関係にあったのです。440Hz に慣された現代人の耳だからこそ 528Hz と 396Hz が気持ち良いのです。これは平均律と純正律の間の矛盾の問題であり、古代人の感覚ではなく、まさに現代人の感覚なのです。

<528Hz は DNA を修復するか？>

528Hz が現代人にとって心地良く響く以上、それが身体に良いと信じて聴けば、傷ついた DNA を修復あるいは排除するなどの免疫力を高める効果があることは否定できません。ただしそれは受け入れる人の心の問題で、信じて行えば良い効果が現れるかもしれないということです。科学的に 528Hz が DNA を修復するということを証明することは出来ません。528Hz の提唱者レオナルド・G・ホロウィッツ著の「ジョン・レノンを殺した凶気の調律 A=440Hz」にも科学的な論拠は示されていません。

<現代人の作ったソルフェジオ周波数>

ソルフェジオ周波数は現代人の作ったものと考えられます（ホロウィッツ氏自身が作ったのかもしれませんが）。そもそも音や電磁波の振動数（1秒間に振動する数/Hz）を計ることができるようになったのは 19 世紀以降のことです（ヘルムホルツの実験）。振動数の単位にもなっている Hz（ヘルツ）は、振動物理学の元祖である 19 世紀の物理学者ハインリヒ・ヘルツ（1857～94）の名によっています。古代人や中世人では、その単位である 1 秒すら正確に計ることはできなかったはずで、ましてや古代人に周波数などという認識はなかったと考えられます。

音が振動する波であることを最初に認識したのはガリレオだともいわれています。また音の媒質が空気であることを証明したのは 17 世紀のイギリス人化学者ロバート・ボイル（1627～91）

でした。

＜ソルフェジオ周波数のしくみ＞

ソルフェジオ周波数はカバラ数秘術で作られています。その根本の数は3で、3は古代宗教ではもっとも聖なる数とされました（キリスト教でも三位一体など3は常に聖なる数として扱われている）。前述したようにソルフェジオ周波数の基本となる周波数は、440Hz から純正律で導かれる 528Hz と 396Hz です。

この数にカバラ数秘術で3桁の3を表す 111 を足し引きして等差数列（常に同じ数を足して出来る数列）を作ります。ソルフェジオ周波数はすべて3で割り切れる数です。

$$396-111=285$$

$$285-111=174$$

これで、174、285、396 のソルフェジオ周波数の最初の3つが出来ました。

次に 528 から、

$$528-111=417$$

$$528+111=639$$

これが、417、528、639 のソルフェジオ周波数の真ん中の3つとなります。

最後の3つは 741 から始まります。

$$741+111=852$$

$$852+111=963$$

となり、741、852、963 となります。

さて、639 と 741 の関係はどうなっているのでしょうか？

$741-639=102$ となり 111 ではありません。ここでもう一度ソルフェジオ周波数を整理して、数秘術で換算してみます。やり方は3桁の数をそれぞれ足していき、2桁の数になったらさらに足し1桁の数にします。

$$174=1+7+4=12=1+2 \text{（数秘術 3）}$$

$$285=2+8+5=15=1+5 \text{（数秘術 6）}$$

$$396=3+9+6=18=1+8 \text{（数秘術 9）}$$

$$417=4+1+7=12=1+2 \text{（数秘術 3）}$$

$$528=5+2+8=15=1+5 \text{（数秘術 6）}$$

$$639=6+3+9=18=1+8 \text{（数秘術 9）}$$

$$741=7+4+1=12=1+2 \text{（数秘術 3）}$$

$$852=8+5+2=15=1+5 \text{（数秘術 6）}$$

$$963=9+6+3=18=1+8 \text{（数秘術 9）}$$

こうして見るとソルフエジオ周波数の数列は、カバラ数の「3、6、9」の繰り返しになっていることが分かります。6は、 $3 \times 2 = 6$ であり、またその数のすべての約数の和と自身が等しい完全数（ $1+2+3=6$ ）といわれる特別な数でもあります。9は $3 \times 3 = 9$ 、つまり3の平方数です。このように「3、6、9」は「3」という聖なる数のグループであり、中世では音楽理論の中心となった数です。東洋でもこれは「弥勒菩薩」の「みろく」につながる神聖な数です。

さてここで、それぞれのソルフエジオ周波数から対応する「3、6、9」を引き、それを9で割ります。その答えをさらに、後の数から前の数を引くと12という数が現れてきます。

$$(174-3)/9=19$$

$$(285-6)/9=31 \quad 31-19=12$$

$$(396-9)/9=43 \quad 43-31=12$$

$$(417-3)/9=46 \quad 46-41=5$$

$$(528-6)/9=58 \quad 58-46=12$$

$$(639-9)/9=70 \quad 70-58=12$$

$$(741-3)/9=82 \quad 82-70=12$$

$$(852-6)/9=94 \quad 94-82=12$$

$$(963-9)/9=106 \quad 106-94=12$$

ここに現れてきた数列は43と46の間が3になる以外は、すべて12を足すことでできています（公差12の等差数列）。12は3の倍数でありながら4でも割り切れる約数の多い特別な数です。12進法は時間で使われており、12は時間を司る数ともいえます。また、数秘術では3になります。

639と741の関係の必然性はこれで説明できます。43と46の間が12にならないのは、396と528の関係からの必然で、ここだけは基数の3になります。

963に111を足すと1074となり、0を無視することにより、これは最初の数174となり、このソルフエジオ数列は循環します。

このようにソルフエジオ周波数は、カバラ数秘術を使って意図的に作られています。

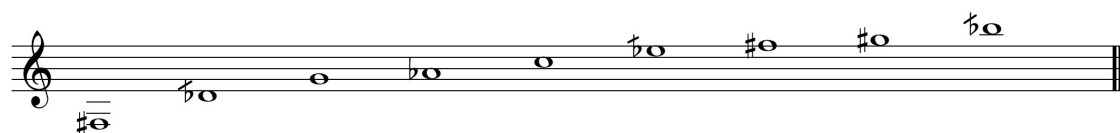
<ソルフエジオ周波数はグレゴリオ聖歌に使われた古代の音階か？>

ソルフエジオ周波数はグレゴリオ聖歌に使われていた失われた古代の音階であるといいますが、そのような証拠を残す記録はまったくありません。グレゴリオ聖歌はローマ教皇グレゴリウス1世（在位590～604）によって編纂された聖歌だと信じられてきましたが、今日ではグレゴリウス2世（在位715～731）の時代に編纂が始まり、カール大帝とその後継者が様々な地方の聖歌方言を統一しようとして作ったといわれています。

グレゴリオ聖歌には様々な先行する古聖歌があり、中でも東方教会の影響を受けたといわれるアンブロジウス聖歌は今日でも歌い継がれています。それらの古聖歌にもソルフェジオ音階があったことを示す影響は認められません。

しかし古代の音楽はすべて消えてしまっており、文献資料から分かる古代ギリシャ音階などの他にも、現代人には想像もつかない音律を使った音階があったかもしれません。ソルフェジオ周波数が音階であったとすると、現代人にとってはかなり奇妙な音階に聴こえます。たしかにそれがなかったという証拠もありますが、あったという根拠もありません。あったと信じる人にとってはあり、疑う人にはないのかもしれません。

ソルフェジオ周波数を譜面にすると、おおよそ次のようになります。スラッシュのついたフラットはおおよそ半音の半分（4分音）低いことを意味します。



<ソルフェジオ周波数は聖書の言葉か？>

「ジョン・レノンを殺した凶気の調律 A=440Hz」には、旧約聖書の『民数記』7章12節から始まる部分に、6つの音の周波数が節番号に隠されているとあります。隠されていた数がソルフェジオ周波数の、396、417、528、639、741、852 だというのですが、このデータは恣意的に取られた可能性があり信用できません。ただし聖なる言葉の裏に数秘術の数を隠すことは古代や中世では当たり前のことなので、仮にこれが本当だとしても周波数の事を意味しているという根拠はありません。

<ソルフェジオという言葉は11世紀に作られた>

ソルフェジオはソルフェージュと同じ言葉ですが、ソルフェージュとは楽譜視唱のことであり、楽譜をドレミ・・・で読んで歌うことです。ソルフェージュはフランス語で solfège、その他 solfeggio, solfeo, sol-fa, solfedge, solfaggio と書かれます。元々 solfège = solfaggio という動詞には、sol（ソ）を fa（ファ）に読みかえるという意味がありました。

ドレミの音階名は11世紀の教会音楽指導者ガイード・ダレッツォ（991～1033）により作られた「聖ヨハネ讃歌」冒頭6つの句の出だしからとられた「ut, re, mi, fa, sol, la」によります（のちに ut は do に変る）。ut は C（ド）の位置と決まっていた訳ではなく、F（ファ）と G（ソ）のこともありました。つまり「ut, re, mi, fa, sol, la」は C と F と G のそれぞれから始ま

る場合があったのです。この3種類の読み方は必要に応じて途中で読み替えられることがありました。これをムタツィオといいます。sol（ソ）を fa（ファ）に読みかえるということはムタツィオであり、ここから solfège = solfaggio という言葉が生まれたのです。このことから古代ソルフエジオ音階という言葉は矛盾しています。

<結論>

以上の考察により、528Hz と 396Hz には 440Hz と純正音程関係になる意味があることが分かりましたが、ソルフエジオ周波数の歴史的経緯や DNA の修復効果などについてはほとんど根拠がなく、提唱者のレオナルド・G・ホロウィッツ氏も「そうである」という結論しか述べていないようです。それを信じるか信じないかは個人の感覚の問題ということになります。また、528 と 396 から作られたソルフエジオ周波数はカバラ数秘術で作られており、それ自体なかなか興味深い数列となっています。

近年ヒーリング業界で大変もてはやされているソルフエジオ周波数ですが、良い効果が期待できるのであればそれを使うことになんら問題はないと思います。ただし今まであったソルフエジオ周波数についての説明には、納得のいかない部分も多くありました。もちろんそれに納得して、信頼のよりどころにしている人の心を乱す必要はありません。それで癒されている人はそれで良いのです。しかし、ソルフエジオ周波数には良い面もあるが、どうも納得できないことが多い、あるいはどう成り立っているのか本当のところを知りたいという人も多いことと思います。まだまだ未完ではありますが、本論者がその人たちの推考の役に立てれば幸いです。